

高

朋友

1986



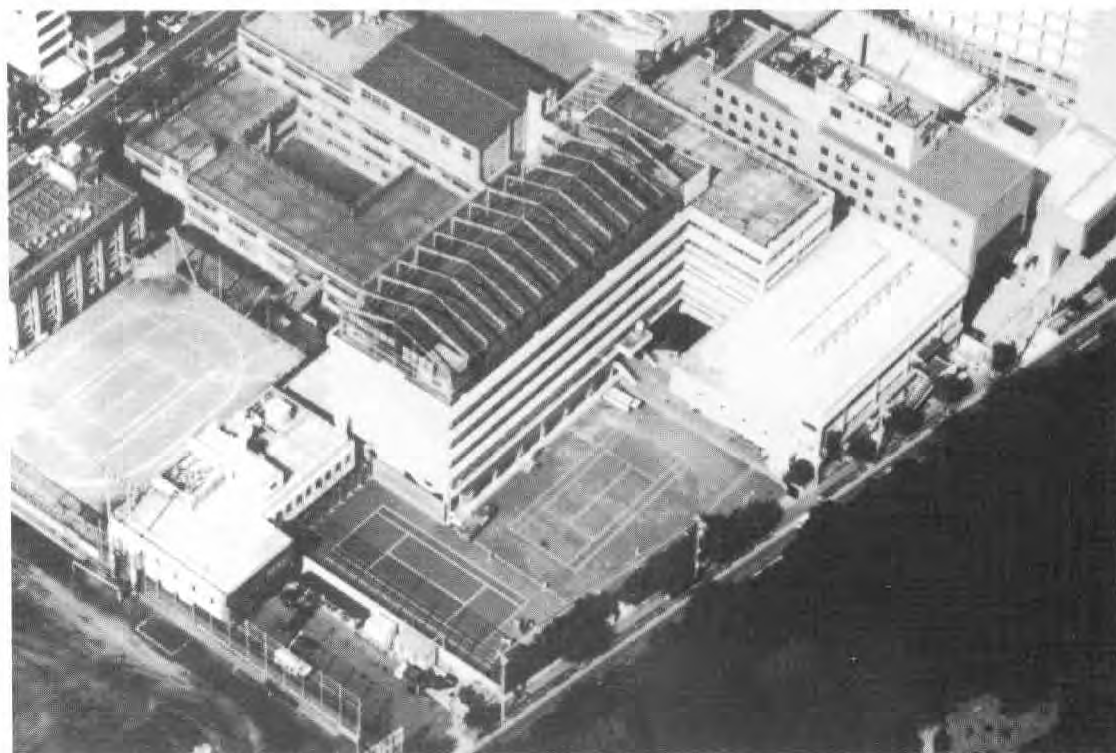
東京電機大学高等学校同窓会

「朋友」創刊によせて……………	1
母校を初めとする学園の近況……………	2
本学園創立者広田先生の思い出……………	3
〔講演〕エレクトロニクス先端産業と今後の方向……………	5
〔名簿〕歴任教員……………	12
現教職員……………	14
同窓会会則及び組織図……………	16
クラス委員名簿……………	17
同窓会の活動報告……………	26
クラス会お祝金について……………	28
名簿の整備・校友会案内……………	29
後援会活動……………	20

《表紙について》

表題の「朋友」は現高等学校吉田宇一校長の直筆によるもので、同窓会幹事会において鷺見篤氏よりご提言いただいたものです。「朋友」は仲のよい友達とか友人という意味を持ち、英語での「FOR YOU」……（会員皆様方のための）という意味を持たせております。

又、表紙の「若者の像」は河部貞夫先生の作で、学園創立60周年記念と合わせ、同窓会で募金したレリーフ基金及び学園、生徒会の援助により製作されたもので、小石川校舎玄関口右手におかれています。このたび本誌のため、この像の写真を基に、当時を思い出し再度デッサンをしていただきました。



《小石川校舎全景》

「朋友」創刊号によせて

東京電機大学高等学校校長
東京電機大学高等学校同窓会名誉会長

吉 田 宇 一



『朋友』は高校同窓会創立25周年の特別号としてその年限りの記念誌だと思っていた。

ところが印宮会長から連絡をいただき、会報を継続して毎年発行できるようになった、予算の見通しもたったとのことである。役員諸氏の活動に頭が下るおもいである。ここ10年をふり返ってみると、会の発展は1年増しに目ざましいものがあったと思う。

私も校長就任以来、学校の発展は、同窓会と在校生（ご父母）との緊密な連繋が必要であると折にふれ申し上げてきたが、それに応えてくれるかのように歴代の同窓会役員諸氏が手弁当で、ご自分の時間を犠牲にしてよく集まり、よく協議して次々と計画を実行して下さった。

同窓会がその本領を発揮したのは何と言っても、高校創立40周年記念式典だったと思う。勿論これはそこまでの諸先輩が歴代辛苦して育ててきた会の底力が大きく作用したからこそであるが、学校、PTAと共に立派な式典を盛会裡に終らせうえに、会員から寄付を募って母校の校庭整備にも一役買って下さったことは忘れられない大きな業績である。

その後、年毎に新しい援助を在校生に対してうち出していたが、昭和54年12月には、これまたPTAの方々と共に高校のクラブ後援会々則を制定され、翌55年度から活動をはじめられる。

本校のクラブ活動に対する考え方としては、それぞれのクラブの技術の向上や、内容の研究以前に、規律と礼儀を第一として、クラブで鍛えた節度と忍耐力を日常の学校生活に反映させたいと願っている。そういう中でも、部員の努力で、高校総体に東京代表で出場するとか、関東大会の東京代表になるとかということが時たまある。そういう時に、後援会の援助は誠にありがたいと思う。それから、ご承知のように本校のグラウンドは東小金井という遠方にある。これに通って練

習をする生徒に対しては、交通費の補助もありがたい一つである。毎年300万円近くになる後援会の補助を以上申したような代表として出場する時の経費の一部、交通費の補助、各クラブの備品の購入の補助等に使わせていただいているところである。

また、同窓会では昭和59年度頃から、体育祭のクラス別対抗の表彰やら、生徒全員に参加賞を配布するなどの活動をいただいたり、部活動優良者の表彰等（終業式において）にも気をくばっておられる。

このように同窓会と母校との関係は一年増しに関係を深めている。学校もまた相呼応して同窓会の成長発展の為に工夫をしてゆかなければならないことは勿論である。本年度は卒業年度を決めてホームカミングを同窓会と話し合っているところである。今までもその精神で同窓会に対する活動はやってきたが、ホームカミングとははっきりした方がよいという意向が多いようなので、それに添うように考えているところである。

今後とも、学校、同窓会、在校生（父母）三者が、和気藹藹のうちに発展されることを祈るものである。

母校を初めとする学園の近況

東京電機大学高等学校同窓会会長 印 宮 登

○はじめに

昨年は、同窓会創立25周年ということで、記念講演・記念祝賀会を盛大に開催することができましたのも、偏に、会員である卒業生の皆様、特別会員である教職員の皆様の暖かいご支援・ご協力と、推進役となった同窓会役員の皆様の努力の賜ものと、深謝致しております。

昨年、25周年特別号として発刊した「朋友」も、今年度から同窓会誌として毎年1回、定期刊行できるようになりました。編集企画担当として、前回と同じメンバーの柴山・石崎・須賀の三氏に、お骨折り頂いております。親しみもてる会誌にしてゆきたいと、考えていますので、ご意見やアイデアを係までお寄せ下さい。

昨年の総会より、今日までの母校を中心とする学園・校友会の主要なできごとを報告して、同窓会長挨拶に変えさせていただきます。

○学園のこと

既にご存知のことと思いますが、この4月1日付けで廣川利男先生が、第5代理事長に就任されました。先生は大学電気工学科第2回のご卒業と同時に、学校に奉職された生粋の電大人です。学園発展に対する意気込みは、連見前理事長に優るとも劣りません。私達卒業生は一丸となって、廣川理事長を盛り上げ、学園を益々発展させなければなりません。皆様のご協力をお願い致します。

連見先生は、昭和46年4月より本年3月迄、15年間の長きに亘り理事長の重責を果たされましたが、創立75周年記念事業の完了をまって、ご高令を理由に交代されました。退任後も理事として、学園の発展にご尽力戴けるとのことです。また学園創立者広田精一先生のお孫さんよりご寄贈頂いた、創立前後の書類を整理・とりまとめられるご予定で、「広田先生の思い出」を本号にご寄稿戴いておりますので、是非ご一読下さい。ご寄贈頂いたものは、3/4世紀以上前のものですから、クリップ等の鉄類は腐食して跡形も無いが、和紙に墨で書かれた書類そのものは、しっかりしているそうです。

○高等学校のこと

高等学校も年々評価が上がり、受験者・合格者ともにレベルが高くなっています。更に今年から授業料免除の特待生制度が発足し、成績優秀な生徒の確保に役かっています。また、1号館（本館）の全教室に冷房装置を設置し、夏期学習活動の改善が図られました。

一方卒業生に対しては、卒業生招待会（ホームカミング）の実施も計画されておりますが、詳細については、決定次第ご連絡致します。

○大学のこと

学長には、中野道夫先生が再任され、61年度には理工学部情報科学科・応用電子工学科の2学科が増設され4月より新入生が勉学に励んでおります。また学科増設に伴う、6・7号館も完成し、更に侵入経路も双方より可能となるなど、鳩山キャンパスも大きく変わりました。

○校友会のこと

大学・電機・高校の卒業生を会員対象とする校友会は現在、正会員数1万8千名程度で、会費を納め忘れている方が多数います。同窓生の皆様の廻りで、その様な方がおられた場合、一言ご勧誘をお願い致します。その校友会の中心となる理事長には、昨年9月、二工22年卒業の丸山孝一郎氏が就任され、会勢拡張（会員増強）を初め会員相互の親睦を図ることを目標として努力されています。高校卒業理事初め全理事が一致協力して、校友会事業に取り組んでいます。

学校法人理事・評議員も昨年末より今春にかけて改選され、卒業者理事3名中1名、卒業者評議員17名中7名が高校卒業生で、学園運営に努力しています。

○学園創立75周年記念募金のお礼

昭和57年4月より開始された、創立75周年記念募金も目標額7億円を上廻る8億8千万円弱の申込を頂き、本年3月末をもって無事終了致しました。この内高等学校卒業生は申込件数240件、金額にして717万円と数字の上では小さく見えますが、最終卒業校で区分している関係で、かなりの方々が大学の区分に入っています。

これらお寄せ頂いた募金により、小石川地区では校庭拡幅、神田地区では11号館の建設、校友会館（10号館）の確保等の記念事業を滞りなく完了することができました。募金委員会副委員長の一人として、紙面をお借りして、厚くお礼申し上げます。なお募金にご協力頂いた方には「東京電機大学小史」をご送付致しましたが、未だお手元に届かない方は、学園経理部までご一報下さい。

○おわりに

以上、母校・学園・校友会の近況についてご報告申し上げます。同窓会・後援会については、本誌に詳細が記載されておりますので、ご一読下されば幸甚に存じます。



本学創立者広田先生の思い出

学東京電気大学理事（前理事長）
東京電気大学名誉教授

蓮 見 孝 雄

（この広田先生に関する一文は、5月17日に行なわれた、高等学校PTA総会に先立って、講演いただく内容の大纲を綴っていただいたものです。）

—5月8日記—

本学の歴史は明治40年、広田精一、扇本真吉両先生によって創立された電機学校に遡る。このたった一行が私にとっては様々な感懷を生む。というのは私は幸運にも大正11年から昭和6年まで約10年間、少年期から青年期にかけて広田先生の膝下にあつて薫陶を受けたからである。

私が電機学校を卒業したのは大正11年秋で、その時点で先輩卒業生は約6000名あったが、64年後の現在、広田先生を語りうる人は皆無と云ってもよいと思われる？、とすれば先生に関するいろいろな思い出を記録することは私の義務であると云っても差支なからう。このような考をもつようになったきっかけは昭和46年、東京電機大学校友会から広田精一先生の生誕100年を記念する特報記事の執筆を依頼されて調査を行ったことである。先生に関する事蹟を知る一つの方法は、先生を知る人々——殆んどは先生が初代校長であつた旧神戸高等工業学校（現神戸大工学部）の初期の卒業生——に思い出を知らせてもらうことであると思ひ、「広田精一先生に関する事蹟、思い出等の原稿御依頼の件」なる依頼状を約100名に差出した。結果は予想を上廻る御返答を頂き、重複するものをまとめ、長文のものを要約したりして、「広田精一先生の思い出」なる小冊子として自費出版し、返答を寄せられた方々に稿料の代りとしてお届けした。

その二、三を紹介すれば、大正15年卒稲垣敏夫氏（元松山放送局長）の「私は卒業前、夏季実習でお世話になった電力会社に就職の目安がつき、そのことを先生に報告やらご相談のためお目にかかったところ、しばらくして大阪放送局（大正14年開局）へ就職したらどうかとのお言葉につづいて、放送事業の国家社会的な重要性和その将来性について述べられたので愛し、放送局へ就職する決心をした。中略、当時の放送事業は東京、大阪、名古屋とそれぞれ分立（大正15年8月これらが合同して日本放送協会になった）し、大阪放送局のラジオ聴取者数は6万3000、三局合せて約23万であつた。以



来わが国の放送事業の飛躍発展は名実ともに世界に冠たるものがあり、今を去る約50年前、すでにこのことを見とおしておられた広田先生の遠見、偉さには、ただただ頭がさがるのみである、云々」

元日立製作所専務取締役 故網盛孝氏は「入学して間もなく授業が終わってから4人宛、キャンパス内の校長官舎に招かれ馳走になりながら校長先生を囲んでいろいろお話を伺った。

君達は技術の勉強をするわけだが電気とか機械のことだけ学んだらよいというわけではない。経済のことも、また外国語についても自分で心掛けて勉強しなければならぬ。自分が電気技術者であり乍ら汎太平洋会議の日本代表の一員として選ばれたのも、唯語学が出来るということの為に、その機会が与えられたわけである。今日の教養科目を重視すべきことを諄々と語られた。中略、昭和4年卒業して日立に入社し、本社にて当時の小平社長に挨拶した処、「君は広田精一先生に教わったのか、それはよかったね」と云われた時には、何とも云えぬ有難い気持ちになった。」

なお、小冊子を作るに当り、またその後も先生の嫡孫の広田貞雄様からいろいろ貴重な話やら資料を頂き目下その整理中である。いつか茅ヶ崎のお宅へ伺ったとき広田家の系図表を見せて頂きましたが、それによると御

先祖は摂津の国一兵庫県西宮市一の広田大明神の家臣で延暦20年坂上田村麿に従い東夷を征伐し、鈴鹿山に於ける戦功により広田姓を賜ったとのことである。さて精一先生のところの記入では電気技術者、教育者、植林功労者という書込があるが、植林功労者としては余り知られていないのではないだろうか？

植林の功労者広田精一先生

大正のはじめ、茅ヶ崎東海岸は不毛の砂浜であった。病後の身を養うためにここに居をかまえた先生は、松をもってこの砂浜を緑化せんと志した。二万坪の砂浜に万余の松苗を植えた。しかし太平洋の南風は休みなく砂塵をあげ、苗はたちまち砂に埋れて枯れていった。

× × × × ×

先生は失望したが、ひるまなかつた。植物の書をひもとき植林の歴史を調べた。はまえんどう、金雀枝の種を播き、その根が砂中に拡がり砂の固まるのを待って再び苗を植えた。1年、2年、苗はすくすくと伸びたが、今度は松虫に新芽を蝕ばまれて枯れてしまった。

× × × × ×

三度苗を植え、松虫との攻防がはじまった。今日のような農業はむろんまだなかった。竹ばさみで一匹はさみつぶしてそのむくろを砂中にうめて肥料とすることを考えそれを実行した。十余年の努力と熱意がついに報いられ、不毛の砂浜は小松ヶ原と変わった。

× × × × ×



大学の同級生、鳳秀太郎博士は先生が茅ヶ崎に療養のことを聞き

春長き茅ヶ崎のはまの松が根に
雲雀き、つゝ千代もへまसान

と先生を見舞われる程になった。

× × × × ×

昭和6年先生は逝った。50余年を経て松は亭々と聳え、松風は絶間なくさらさらと鳴りひびき、先生の功を讃えているかのようなのである。カナダから輸入した金雀枝は、今は神奈川花に指定され種子は輸出されているという。

× × × × ×

私は先生の嫡孫貞雄様に案内されて松林の小径を歩きながら浜の波音と松風の合奏を心ゆく迄楽しんだ。

浅春の松籟ひびく師の舊居

講演

昭和60年度 総会記念講演（昭和60年6月22日 於：小石川校舎体育館）

「エレクトロニクス先端産業と 今後の方向」

日本テキサスインスツルメント(株)

代表取締役社長 石川 明

《 石川明氏略歴 》

昭12・8・12 千葉県野田市に生まれる
31・3 東京電機大学高等学校普通科卒業
（担任：佐藤吉弥先生）
35・3 東京電機大学電気通信工学科卒業
（同期：里見先生＝理工学部産業機械工学科）
35・4 新日本窒素肥料(株)〔現チッソ(株)〕入社
その後チッソ電子化学(株)〔現日本シリコン〕
を経て
43 日本テキサス・インスツルメント(株)入社
54 取締役役に就任
57・9・23 代表取締役社長に就任
日本人として初めての社長

《 日本テキサス インスツルメント株式会社 概要 》

創 立：昭和43年5月24日
事業内容：1.各種集積回路（IC,LSI,超LSI）の開発
・設計、製造販売
2.ICソケット・コネクタなどの制御機器の
製造販売
3.コンシューマ製品をはじめとするエレクトロ
ニクス製品の設計
本 社：東京都港区北青山3-6-12(青山富士ビル4F)
工 場：鳩ヶ谷工場・日出工場・小山工場・美浦工場

印宮（同窓会々長） 本日はあいにく雨の中という原稿を、今朝用意したんですけれども、われわれの気持ちが通じてか、なんとか晴れ間がのぞいてきているようでございます。本日は東京電機大学高等学校同窓会創立25周年記念講演会に、皆様方多数お集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

私は高等学校を41年に卒業いたしました印宮と申しまして、現在同窓会長を務めておるものでございます。この高等学校も大学、高等学校が一緒であった神田から、昭和40年にこの地小石川に移ってきたわけですが、ちょうど今年で20年になります。

同窓会は、その移転に遡ること5年前の昭和35年に、神田の地で産声を上げまして、ちょうど4分の1世紀の25周年ということになりました。この25周年を記念いたしまして、同窓会誌の発行であるとか、記念講演、それから祝賀会というようなことを計画して今日にいたったわけでございます。

25周年ということで、記念講演は卒業生の中からどなたか良いお方がいらっしゃるかというふうを考えておりましたところ、本日「エレクトロニクス先端産業



と今後の方向」と題しまして、ご講演いただく、石川明日本テキサス・インスツルメント株式会社の社長さんをお願いすることになったわけです。

石川さんは、昭和31年に高等学校の普通科を出られ、その後大学に進まれ35年に電気通信工学科を卒業なさったわけでございます。先般座談会の時にお会いいたしました時に、その人柄と申しますか、ヒューマン性豊かな人格に触れて、深く感銘したわけでございます。こ

のことは私の口から申し上げるより、本日お配りいたしました同窓会誌の「朋友」の3ページから始まります座談会記事をお読みいただければ、一目瞭然でご理解いただけると思います。それと本日の講演に際しましては、当時の組主任でいられた佐藤吉弥先生の多大のご尽力があったことを、特に申し添えたいと思います。それでは石川さんをご紹介いたします。

石川 ただいまご紹介いただきました石川明でございます。ほぼ30年になりますが、高等学校を卒業して今日エレクトロニクス、半導体産業の一端を担いビジネスをしているわけですが、当高等学校の25周年の同窓会記念に際して、先生方、在校生の皆さん方と同窓生の皆さんの前で、話をして欲しいというお話があったわけですが。

たいへん名誉に思うとともに、私の持てる知識で十分なお話ができるかどうかたいへん不安でございますが、約1時間にわたって、今日までの先端エレクトロニクス産業の進展と、当面いたしております問題点、今後の方向がどうなっていくんだろうかということ、私なりにお話をさせてもらいたいと思います。

最初の20分ぐらいをスライドで、今日までのエレクトロニクス産業の経過がどうであったかということをお話しして、そのあと今後どういう方向になるんだろうかということのお話をしたいと思います。

それではスライドをお願いいたします。今から32年前になるわけですが、半導体というものがトランジスタというかたちで現れてきたかたちが、ベル・テレフォン研究所がゲルマニウム半導体を発明いたしました、それを世界の約40社に生産の特許を公開したという時代でございます。

私が現在仕事をしておりますところの日本テキサス・インスツルメンツというのは、世界のテキサス・インスツルメンツ世界中で半導体、エレクトロニクスのビジネスをやっておりますが、その中の日本のビジネスを展開するところが、日本テキサス・インスツルメンツでございます。

テキサス・インスツルメンツも32年前に、ベル・テレフォン研究所からゲルマニウムトランジスタの



を買って、この時にRCA、モートルその他の世界中のたくさんの会社がゲルマニウムトランジスタの生産を開始したところでございます。

ちょうど31年前に、この絵にございますように、リージェンシーラジオというかたちでトランジスタラ

ジオが世の中に初めて出た時代でございます。その前までは、ここにありますようなボディが木でできている真空管のラジオであったわけです。リージェンシーラジオということで、トランジスタラジオが世界中で初めて、アメリカで生産されました。

次お願いします。ちょっとスライドの順番が逆になって、時代の古いほうからいうと思っていましたが、一番新しいのから出てきました。これはアーティフィシャル・インテリジェンスというコンピューターでございます。これからの時代のデスク・トップコンピューターでございます。科学万博等でも盛んに論じられております、人工知能コンピューターというものです。

たとえばお医者さんが持っているような知能だとか、薬屋さんが持っているような知能、先生方が持っているような知能の、ほとんどおおかたをデータベースに入れておきまして、いわゆるシンボリックプロセッシングと、最近の言葉で呼んでいるわけですが、胃なら胃の病気について教えてくださいというように、要するにシンボルをコンピューターにインプットしますと、それに関するいろいろの情報を出してくれる。

いままでのコンピューターでは、一つ一つプロセッシングしているのを、ほとんど前もって終らせているというふうなかたちのコンピューターでございます。これはこれからの年代に現れてくるものです。

次お願いします。時代が逆になっているので、もし戻せましたら戻してください。先ほどラジオがゲルマニウムで31年前につくられたと申しましたが、30年前ちょうど私が高等学校の生徒であったところでございますが、トランジスタラジオというのが現れて、それがシリコン・トランジスタというものになってきました。ゲルマニウムトランジスタからシリコントランジスタに変わって、エレクトロニクス産業というのは、たいへんなブームになってきたわけです。その時のシリコントランジスタでございます。

次お願いします。シリコントランジスタが発明されたのが、やはり30年前でございます。それから約3年しまして、1940年代後半、今から27年前になりますけれども、テキサス・インスツルメンツが世界で初めて、ICというものを発明いたしました。これは今のICと比べるとたいへん単純なICでございます。

一つの金属の中にトランジスタ1個、それから抵抗、レジスタ7個、キャパシタ2個という、一個の金属の中にこれらの部品を閉じ込めて機能を待たせたというのが、今から27年前、ジャック・キルビーという、ここに写真の載っている人が発明したわけでございます。

これが現在、筑波の万博にスミソニアン博物館から出されてきてまして、アメリカ館の真ん中に飾られているわけです。それが左の写真です。これが世界で初めての

ICです。回路は単純でして、オーディオのアンプリファイアです。

それでは次お願いします。そのあとずっと時間が過ぎまして、最初のワンチップ・マイクロコンピューターというのが、15年前に開発されまして、それまで一個のダイオード、トランジスタ、あるいは簡単な集積回路を使いまして、コンピューターというものは、机の上に置くコンピューターでも、今のタイプライターくらいの大きさがありまして、値段で40万円とか30万円とかしたような時代が、今から15年くらい前までの時代でございます。

その時に突然現れたのがマイクロコンピューターというものです。右下に写真がありますが、これがICのマイクロコンピューターチップでございます。だいたい5ミリ角の寸法のシリコンチップに、何十万個という数の素子を詰め込んでつくってあるものです。

これができて初めて15年前に、一つのICでコンピューターの性能を持たせるということが実現しまして、それまでのデスクトップ



カリキュレーターというタイプライター型のカリキュレーター、計算機が胸のポケットに入るようになった。この左の上のが世界で初めてできたポケット・カリキュレーターというものです。時代でいうと15年くらい前です。

その次お願いします。これがマイクロプロセッサというのですが、もっとハイスピードのたくさんの計算機能等を持たせたマイクロプロセッサ、マイクロコンピューターとわれわれ呼んでおります。マイクロコンピューターというのは記憶装置、計算装置、制御装置すべてが入っていてマイクロコンピューターの呼んでおります。マイクロプロセッサというのは、処理する機能を大きく持っておいて記憶機能等は持っていない。ただしそれまでは、何百何千というICを使わないとできなかったものが、一つの4ミリ角四方ぐらいのシリコンチップの中に収められた。これも今からだいたい14、5年前におこっております。

その次お願いします。その後たいへんな進歩が、ICの設計の技術革新、それからICをつくるための製造装置や製造工程の革新等を経まして、いわゆるシリコン半導体工場の世界の技術レベルがどんどん上がって来ることによって、今日何千種類、何万種類というICができるようになってきたわけですが、その根本的なところというのは、IC設計技術の進歩とICプロセッシングの技術機械の進歩でございます。

その次お願いいたします。皆さん、シリコンの生産工

程に詳しくない方もおられると思うので持ってきたわけですが、いわゆる地球の約7割を占める珪素を精製しまして、それを単結晶といいまして、非常に精密な整然と並んだ結晶をそれからつくります。それを輪切りにいたしまして、板状にしてその薄い板の上にICチップというものをつくっていくわけです。

この一つの板の上に、約200個のマイクロプロセッサがあるわけでございます。ちょっとピンクっぽいのと白っぽいのが、二つ一組になって一つのICを構成しています。こういうかたちでICは生産現場でつくられて、そのあとそれぞれの一個の四角いチップに配線をして、足をつけというふうにしたのが、真ん中に黒いかたちで置いてあるICでございます。これが完成品のかたちでございます。

これは最近話題のメモリーICでございます。ICの中で非常に重要なものに、記憶をつかさどるICがございますが、昨今ではKDRAMと言っていますが6万4000個の記憶素子を持ったIC、それからまたほんのごく最近出てきました256K、25万6000個の記憶素子を持ったICがあります。ここに載っている左側の図は下が3ミリぐらい、高さのほうが約7ミリぐらいでしょうか。25万6000個の記憶素子を持った、3ミリかける7ミリのシリコンチップでございます。

右の写真はニューヨークのマンハッタン島を飛行機から撮った写真でございます。この部分のほんの一部を拡大したのが右にありますような写真です。このくらいの細かい緻密な道路網とか、建物とか下水とかそういう構造、構築物に相当する程度の細かい配線が、このまっ黒くなっているところ。あの中を1万分の1とか1000分の1ミリの倍率の顕微鏡で見ますと、マンハッタン島全体が入るくらいの緻密な配線、構築がされているということ。

次をどうぞ。先ほども言いましたように、それぞれのIC、いわゆるロジックICといいまして、計算機やあるいはあらゆるマイクロプロセッサ、それから腕時計のロジックICとか、リニアIC、たとえばオーディオ、ラジオ、テレビ等のコンシューマーのリニアICとか、メモリーICとか、今何千何万という種類のICができあがっておりますが、ここに挙げたのは、それらのもの種類の中のICをのせているわけです。

足がムカデのようにたくさん生えているのが、いろいろな種類のICですね。三本の足のあるのが、これがスモールシグナルのトランジスタとかパワートランジスタです。

次どうぞ。世界の半導体というのは、最近どういう規模でビジネスが拡大しているだろうかということを簡単にお話ししますと、この図がそれでございます。1983年というのが一昨年、1984年というのが昨年でございます。

すが、過去の15年間の半導体エレクトロニクス産業の伸びは、年率約21%の伸びでできていますが、一昨年が26%の伸び、昨年と比べて38%の伸びを示しています。売上高の規模でどのくらいかというと、約50兆円ぐらいの伸びを示しています。

MOSそれからバイポーラ、ディスクリサーチ、ディクリートというのはトランジスタとかダイオードのことですが、半導体全体を眺めてみますと、84年、昨年で言いますと、約7割近くがIC、3割ぐらいがディスクリートのトランジスタ、ダイオードというような半導体です。ICのインテグレートドサーキットの中でもMOSのICが約6割近くになってきております。

その次どうぞお願いします。ICの中でも、ますますチップが小さくなってきて、同時に電気の消費量が少なくなるような設計がどんどんされております。ここに書いておりますように、1980年の後半と比べると、パワーの少ないIC、これをCMOS、ICとわれわれは呼んでいますが、どうなっていくんだろうか。

ここに示すようにメモリーのICでいうと、1980年代の後半では、いままでのようなPMOS、ICだとか、NMOS、ICとかいうのは10%ぐらいに対して、CMOS、ICはずっと伸びて、それに対して40%というふうに大きくなります。

次どうぞ。これは最近のクリーンルーム、ICをつくる場所の絵でございます。これからますますICをつくる上では、ごみを嫌う、1000分の1ミリのゴミ、いわゆる目玉からでる蒸気だとか、口だとか鼻から出てくる蒸気の大きさが、だいたい0.2ミクロンから0.3ミクロンです。人が入ってそばであまり息をしたり、目を開いたりすると、ワン・メガビット、これから言いますところの100万個素子のメモリーとか、400万個素子、4メガビットメモリーとかいうのはなかなかできにくいという時代に入ってくるわけです。

これはまだ25万6000個素子程度のクリーンルームです。これがどんどん変わっていきまして、将来はこういうクリーンルームの中には、機械は働いているけれど、人はほとんどいないという状態で生産が進むと思います。

次お願いします。ICの中でもメモリーという記憶をつかさどるところのICのニーズがどんどん増えているわけですが1000個の記憶素子を持った1K1DPMという時代から、4K、16K、64K、256Kと、こういうふうな時代がどんどん移ってきております。

現在1985年では、64KのDRAMといって、6万4000個記憶素子のICの時代がピークにいきまして、これから需要が落ちてくる。それに代わるように25万6000個素子のICが現在世の中にどんどん浸透していきまして、あらゆるカリキュレーター、コンピュー

ターもろもろの素子に使われるようになってきました。この1メガビット、だいたい100万個素子のICが今年後半からサンプル、見本が世の中に出てくるであろうと予想しています。

次お願いします。これはワークステーションといいまして、一部の会社ではどんどん進んでおりますが、各会社あるいは世界中の会社のエンジニアの方やすべての技術者は、自分のデスクでこういうかたちで仕事をする。いわゆるコンピューターを自分の机に置いて、あらゆる科学計算や仕事の指示や機械を動かすことなんか全部できる。

これをワークステーションと呼んでいますが、私どもの会社でも、ほとんどのエンジニアがすべて、一人がこのシステムを一つずつ持っているという状態に入っております。ますますあらゆる産業でそういうふうになってくると思います。

その次お願いします。これらはたとえば英語を自動的に発音してくれるかと、あるいは勉強するとか、あるいは算数をするだとか、計算をするだとか、あらゆるコンシューマー、いわゆる民需要の機器でございます。こういうのもICの発展に伴って、どんどん世の中に現われてきたわけです。

その次お願いします。これはオフィス・オートメーションに欠くことのできないパーソナルコンピューター、あるいはミニコンピューターとプリンターです。これらの品物が今、どんどん市場にあふれ出てくるようになっております。いかにこれらを価値のあるように使うかというアプリケーション、各ユーザー側の利用という面ではまだまだこれからが鍵だと思います。これからのビジネスの発展は、そのへの利用増をどういうふうにするかにかかっていると思います。

その次お願いします。これもワークステーションのひとつです。今まで苦労して、コンピューターが使いにくいというのは、コンピューターを使う人が、それを使う



ための知識を持っていないければ使えなかったからですが、そういう時代からボイス・リコグニション、いわゆる音声認識してインプットするというコンピューターでございます。使う人がしゃべれば、コンピューターが欲しいやつを出してくれるという音声合成、音声認識ICが使われたワークステーションです。

次どうぞ。これがパーソナルコンピューターが、工場の生産現場を管理している模様です。工場の工具さんや従業員の方々も、すべてこういうコンピューターを使う

ような時代に、どんどん入っていくと思います。これが大型コンピューターとつながって、工場全体、会社全体がどうなっているかということがわかるようになっていきます。

次どうぞ。これは工作機械でなんかものを作っているところですが、これもコンピューター制御で仕事がどんどん進むような時代に入っております。

これがさっき一度出ました人工知能コンピューター、アーティフィシアル・コンピューターと言っていますが、これが今後のコンピューターです。人間が考えるのと同じような、人間が経験して頭に蓄積しているのと同じような知能を事前に詰め込んでおいて、いかにシンボリックにというか、システムテックに答えをコンピューターに出してもらおうかという、おそらく今後大きく発展していくかたちのコンピューターです。

では電気をつけて明るくしてください。概略トランジスタが発明されてから今日までのICの発展およびエレクトロニクスの、大型コンピューターの分野は別にして、特にパーソナルコンピューターあるいはオフィス、あるいはファクトリーコントロールというところまでの進展を、非常に短時間でお見せしたわけでございます。

日本のエレクトロニクス半導体産業というのは、たいへんな進展をみせまして、第2次世界大戦以降の40年、それからトランジスタが発明されてから、あるいはICが発明されてから27年という期間で世界の本当のトップレベルの経済大国になったわけでございます。

皆さんご存じのように、この30年という期間を経過いたしましたして、どういことが今日起こってきたかというと、たいへんな技術の発展を遂げることによって、日本のエレクトロニクス製品の品質がたいへん良くなって、値段も非常に競争力のあるものとなって、どんどんそれが産業に活用され、輸出が伸びたということでございます。

その結果におきまして、世界中から日本は羨望のまなこで見られているわけです。これはひとえにこの30年間、あるいは戦後の40年間私どもの父親というか、皆さんの父親、あるいはおじいさんというか、そういう人たちが原材料を輸入してそれに付加価値を加え、技術をそこに付加して輸出するという努力を、一所懸命してきた結果でございます。

ものすごく仕事をして、よそのどの国にも負けない勉強と研究と仕事をやってきたわけでございます。そのために日本はたいへんな黒字国、アメリカやヨーロッパはたいへんな貿易の赤字というふうになったわけでございます。

私どもがなぜそういうふうにやってきたかということ、日本の土地は狭い、資源がないということで、何をいっても原材料を輸入して最先端の技術をもって付加価値を

つけて輸出しなければ食べられない、というふうな小さいところから学校でも教わり、国も会社も一体になってそれを進めてきたという結果が、世界の国民総生産の10%、いわゆるGNPの10%を占めるような経済大国になったわけでございます。

こういう時代になってのこれからのエレクトロニクス半導体、日本の先端産業はどうあらなければならないのか、世界中の先端産業がどうあらなければならないのかというたいへん難しい時にきております。

皆さんご存じのように、毎日貿易摩擦の問題、先端産業の摩擦問題、中曽根首相以下いかにして輸入を増やすかと、外国のものを買うかということ、一所懸命になってやっております。今までの進展に比べて、これからそういう世界のニーズにどういふうにわれわれの先端産業を展開していくかということが、たいへん難しい状態にきているのではないかと思います。

私ども日本国民というのは、たいへん勤勉で優秀であるわけで、アメリカでラジオが発明されるということになりますと、さっそくそのパテントとか技術を買ってきて、世界一のラジオメーカーになってしまう。アメリカのラジオメーカーはすべてつぶれてしまう。ヨーロッパもつぶれてしまう。テレビというのがアメリカで発明されると、そのノウハウやパテントを買ってきて、圧倒的な力ですれをつくって、安く品質良くつくる。アメリカのテレビメーカーはほとんどつぶれてしまう。

こういうようなことで、自動車にいたしましても、ステレオにいたしましても、何にいたしましても日本の出るところ、おそらくかなう国はないという現状でございます。これからのエレクトロニクス半導体、およびエレクトロニクスのコンピューターもそうですが、間違いなく日本が強くなってくるわけでございます。



そういう中で次々と今までと同じように、いわゆる洪水のように輸出する。どんどんお金を稼いできて、よその国が赤字になる、失業する、会社がつぶれるという、そういう状態のビジネス、あるいはそういうことをどんどん加速的に奨励する国というもので、はたして日本は全世界の友達として、長期的に争わずに仲良くやってい

けるんだろかということになると、たいへんなクエスチョンマークに、現在陥っております。

今後の方向はどういうことになるのかというと、ここまでの技術レベル、あるいは豊かさというものが整った時に、日本は世界の低開発国や、低技術国にいかに関与するか、世界中のマーケットや人々の中に入り込んで、いかによその国のレベルを、今日の日本のレベルに引き上げるかということで、相当の貢献をしないといけないのではないかと、いう時代に入っていると思います。

戦後完全に廃墟となった日本が、今まで世界中にお世話になって、いろいろな技術やノウハウを手に入れて、勤勉な努力、優秀な知能で今日までやってきた。



それを同じように、たとえば韓国ですとかよそのいろいろの国の人たちが、私どもにノウハウを売ってください、パテントを分けてくださいとかいうふうに、最近どんどん来るわけなんです。

昔たいへんお世話になって、今日、日本がここまで来たということを忘れて、パテントとかノウハウを教えてやったら、そのうちに韓国に負けてしまうのではないかと、あるいは台湾に負けてしまうのではないかと、中国はどんどん強くなるのではないかとというような、自分たちの過去を忘れた動きというものになってしまい、これがスムーズに日本が世界全体の中で歓迎されない要因の一つともなっているわけです。やはりわれわれは、これからのエレクトロニクス産業が世界的に進展し、単に日本だけでなく、世界の未開発国や後進国がいかに早く日本と同じようにりっぱな強い国になるかということ、いかにしてわれわれが援助するかということが非常に大きな課題だと思います。

これ以上どんどん輸出を続けたりなんかして、世界中から嫌われる、今アメリカの国会で大問題になっている日本の輸入の規制の問題だとか、超過労働時間の問題だとか、ヨーロッパやアメリカでのダンピングの問題だとか、もろもろ連日のように騒がれておりますが、過去の戦争経験をお持ちの方は分かると思いますが、すべての過去の大混乱は、経済摩擦の問題から発展しております。

現在、爆弾とかもろもろの武器を使って攻撃や侵略をしているわけではありませんが、経済的に侵略する、あるいは侵透し過ぎることが、われわれが友達と思っているヨーロッパやアメリカや世界中の人々から敵対意識で見られるようになると、将来をたいへん間違えることにな

るのではないかとということで、中曽根首相以下、業界の方々と皆さんがたいへん心配して、今、頭をひねっているところでございます。しかし、なかなかこの30年、40年という長いあいだに体にしみついたわれわれの行動というものは、一瞬にして直せないというところに問題の難しさがあります。

ただ明確に言えることは、日本の国内だけでは、われわれが全力をあげてつくった品物を完全に買い切ることはできない、消化しきることはできないわけですから、なんとしてでも世界中の国々と仲良くしていかないと、日本の先端産業の発展はないと思います。

各エレクトロニクスの先端企業すべてが、今年以降おそらく、日本の設備投資は縮小しても、アメリカ、ヨーロッパいわゆるマーケットのあるところ、お客さんのいるところに投資をすると思われます。それぞれの国の人を失業に追い込むとか、あるいは会社を倒産させるということではなくて、工場をつくってそこで生産をし、その人たちを使って、その経済や国に貢献しようというようなかたちでの産業展開が行われる。おそらく5割、6割生産品を輸出していたとすると、今後5割、6割分は、外国に投資して外国でつくらせるということに、ますますなってくると思います。

アメリカ、ヨーロッパばかりではなく、東南アジアの低開発国、アフリカとかもろもろの国も、いかにして文化が向上するか、経済的にも良くなるという面でも、日本は貢献しなければならないというふうに思いますので、そういうところへの投資も行われるでしょう。

そう考えてみますと、こういうことが間違いなく今後5年、10年で起こってまいります。今まで私どもが一所懸命勉強し、高等学校あるいは大学を出て仕事をする場は、ほとんどが日本で100人のうち90人、95人が仕事のできたわけです。

これから社会に巣立って仕事をする方は、ますますこの狭い日本だけを仕事のターゲットというか、仕事の間と考えるにはあまりに狭すぎる。飛行機に乗れば8時間、10時間でアメリカ、ヨーロッパ、東南アジアには簡単に行けます。そういう時代です。

そこで日本企業が世界中の人たちと仲良く、世界の発展のため、日本の発展のために長期的な平和を目指して、経済の生産活動を行うという意味では、どうしてもこれからたくさん日本人が海外で、しかもなんのこだわりも、あるいは不便もなく住めるというような人間に育っていかなければならないと思います。

それがもしできないとすると、おそらく日本人は島国根性でおつき合いも悪いし、国際的にはやっぱり理解されないという人種にならざるをえないんじゃないかと思えます。どうやって世界中の人たちの中で仕事ができるかということ、もう一つの方法は、世界の人たちをどんど

ん日本にも呼んで、日本に住んでいただいて、日本でも仕事をしていただく。

いわゆる日本はフリートレードといいますが、自由貿易がなくなるとはたない。世界の経済も自由貿易の拡大なくして存在しえないということを考えた場合に、それをどうしても必要とするのは日本でございます。アメリカとかその他の国は自分で食糧もまかなえますし、経済交流を断ったとしても、自分で生きていけるわけですから、日本はそう簡単にいきません。

どうやってそれをやり遂げるかということ、ひとえにこれからの日本の若い人たちが、日本という国は自分たちの働く一つの地域である、というふうにして仕事をしないといけないんじゃないかと思えます。

私は世界の20数か国の人たちと、世界中の国や工場を回って仕事をし、付き合う機会もたいへん多いわけです。たいへん皆さん、日本人というものに対して、奇異に感じているというか、いわゆるインターナショナルなセンスが欠けているというふうな見方をする方が多いと思います。そこが打破されてうまく溶け込めないと、今後の日本の経済というものは、なかなかうまくいかないのではないかと考えております。

これからの時代は、先ほどスライドでお見せいたしましたように、エレクトロニクス、コンピューター産業がどんどん進展してまいりますと、世界中の人のコミュニケーションする、話をするというのも、リアルタイムで一瞬のうちにできるような時代が、もう数年でまいると思います。皆さんのそれぞれの家庭から世界中の人と話をし、あるいは顔を見ながら話ができる、仕事ができるという時代が時間の問題で来ますので、その狭い日本ということにこだわらずに、ぜひやっていただければと思います。

私のところの会社の幹部は、だいたい会社のパソコンを家庭に備え付けさせているわけですが、私のうちにもございます。24時間リアルタイムでいつも世界中の国と会社の人たちと、鹿島の地上局から人工衛星を通じてコミュニケーションができる。日本中のどこかの工場とでも、私のうちから電話回線を通じて話ができるというふうになっております。

数年すれば、極端にそれらの値段も下がってまいりますので、皆さんもそういうふうな世界中の人と、あるいは日本中の人とにコミュニケーションをするということが、おそらく日本の将来のビジネスの発展にもかわってくるだろうと思います。



日本でも、小中学校でもますますパソコンを使うようになってきますと、おそらくわれわれの仕事なり生活の行動思考もたいへん変わってきて、年をとってコンピューターに不慣れな方という人は違和感を感じてしまうと思います。それでもコンピューターそのものが難しいものではなくて、先ほど言ったようにボイス・リコグニションを通じて、家庭の奥さんでも子どもでも、だれでも使えるという時代に入ってくるのではないかと考えております。

なんとしても大切なのは、今急速に世界中が混乱状態に陥っている貿易摩擦の問題、あるいは輸出規制の問題だとか、あるいは輸入課税金の問題だとか、こういうようなことがアメリカの議会で全員賛成とかなんかで、日本に対して報復処置をとるといふようなことがないよう、ぜひ皆で努力しなければならないと、エレクトロニクスの事業を遂行している企業のトップの方々はいへん心配されているわけです。そこをなんとかクリアして、しかも今後順調に日本の先端産業が発展するためには、やはり若い人たちの、世界に目を向けた努力というのが必要だろうと思います。

そういう意味では、当高等学校なり大学において勉強される皆さんにしても、単に電気とか数学とか物理とということだけでなく、英語、国語とかいわゆる外国社会に出られた時に語れるものを持っておられたら、すばらしいというふうに思います。私の話はたいへんとりとめもない話になってしまいましたが、一応このへんでエレクトロニクス産業の今日までの発展と、これからどうなっていくだろうかということ、私なりにお話し申し上げました。どうもありがとうございました。

印宮 たいだいまをもちまして、25周年記念講演会を終らせていただきます。今一度、講師の石川さんに、盛大な拍手をお願いしたいと思います。引き続き同窓会では総会を行います、5分ほど休息を入れたいと思います。

生徒の諸君にはたいへんご苦労さまでございました。非常に誇れる先輩を持ったことを皆さんも誇りにして、今おっしゃられた電気とか数学だけではなく、英語と国語もというお話でございましたので、明日は日曜日でございますが、来週から勉学に励んでいただきたいと思います。ではここで5分の休息を入れたいと思います。

卒業生以外で、本日講演に来ていただいた方に申し上げますが、同窓会ではこのあと総会をやり、そのあとに3時ごろから祝賀会を予定しておりますので、ここに残られてももちろんけっこうでございますし、前に後楽園庭園というのがございますので、そちらをしばらく御覧になって、3時に隣の後楽園会館にお集まりいただければと思います。ここで5分の休憩を入れ、20分から総会を始めたいと思います。

同窓会会則及び組織図

第1章 名称及び事務所所在地

- 第1条 本会は東京電機大学高等学校同窓会と称す。
第2条 本会は事務所を東京都千代田区神田錦町1-4
東京電機大学校友会内に置く。

第2章 目的

- 第3条 本会は会員相互の親睦を図り併せて会員と母校との連繫を密にし東京電機大学校友会の事業遂行に協力するを以て目的とする。

第3章 会 員

- 第4条 本会の会員は特別会員、正会員、準会員よりなる。
2 特別会員は東京電機大学高等学校の教職員及び本会に特に功労あるものにして幹事会の推薦によるもの。
3 正会員は東京電機大学高等学校、東京電機工業学校、電機第一工業学校、同併設中学校、電機第二工業学校、同併設中学校、電機学園高等学校の卒業生とする。
4 準会員は東京電機大学高等学校の在学生とする。
第5条 特別会員、準会員は議決権、選挙権、被選挙権を有しない。

第4章 役 員

- 第6条 本会には次の役員を置く。
一 名誉会長1名
二 顧問若干名および参与若干名
三 会長1名、副会長2名、及び幹事25名以上50名以内、会計監査2名
四 クラス委員を各クラス2名、地域委員を各地域同窓会1名をおくことができる。

—以下略—

第5章 会 合

- 第9条 総会は毎年1回会長はこれを召集し本会の事業経過計画案、幹事及び会計監査の承認、収支決算予算案の報告並びに議決をおこなう。

—以下略—

第6章 会費及び会計

- 第13条 本会に入会するものは入会金1,500円を納入するものとする。
2 本会の会費は東京電機大学校友会費の納入を以てこれを認める。
第14条 諸会合に要する経費は、その実費を徴収することができる。
第15条 会計監査は、本会の会計を監査する。
第16条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり翌年三月末日に終る。

第7章 会則の改正その他

- 第17条 本会則の改正は総会の議決を要す。

—以下略—

付 則

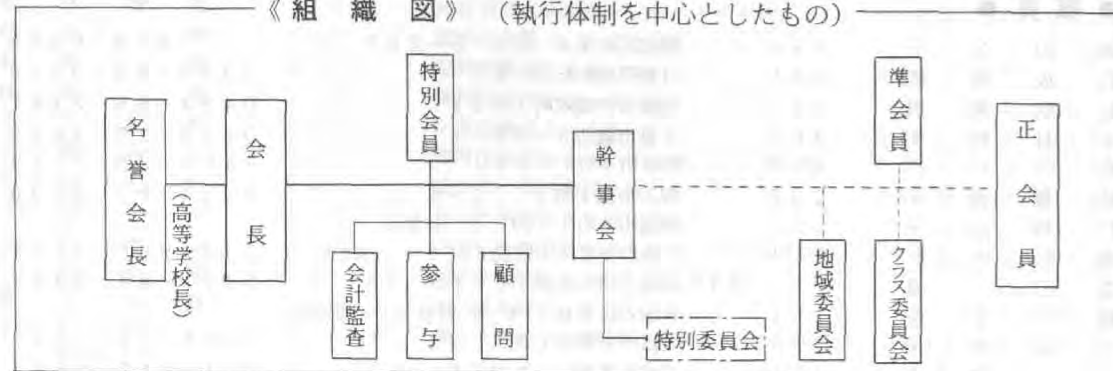
- 1 略
2 昭和56年6月27日全面改正
昭和57年6月26日第13条一項一部改正

東京電機大学高等学校同窓会会則細則

- 第1条 名誉会長には東京電機大学高等学校長を推戴する。
2 顧問は特別会員の中から、参与は会員の中から幹事会にて推薦する。
3 会長及び副会長は幹事会の互選で定める。

—以下略—

《組 織 図》（執行体制を中心としたもの）



クラス委員名簿

◎学校の沿革

電機第一工業学校 (東京電機工業学校)	設立 昭和14年4月 廃止 昭和24年3月	初 版 昭和49年4月 第1回改定 昭和50年4月 第2回改訂 昭和51年4月 第3回改訂 昭和52年4月 第4回改訂 昭和53年4月 第5回改訂 昭和55年4月 第6回改訂 昭和56年4月 第7回改訂 昭和58年4月 第8回改訂 昭和59年4月 第9回改訂 昭和60年4月 第10回改訂 昭和61年4月
電機第二工業学校	設立 昭和19年4月 廃止 昭和24年3月	
電機学園高等学校	設立 昭和23年4月	
東京電機大学高等学校	昭和31年2月1日 校名変更	

◎東京電機大学高等学校同窓会

設 立 昭和35年4月17日
所在地 〒101 東京都千代田区神田錦町1-4
☎ 03-294-1551 (代)
社団法人 東京電機大学校友会

◎東京電機大学高等学校

所在地 〒112 東京都文京区後楽1-7-26
☎ 03-813-6911 (代)

◎校友会・学校の組織



学校・学科・年次別卒業生数一覧

卒業 年次	電機第一工業学校				電機第二工業学校				小計		合計
	第1本科		第2本科	併設	第1本科		第2本科	併設	電機第一	電機第二	
	電気科	機械科	電気科	中学	電気科	機械科	機械科	中学			
	E	M	E	J	E	M	M	J	工業学校	工業学校	
17			89						89		89
18	51		85						136		136
19											
20	100		91						191		191
21	58		48						106		106
22			100		132	50			100	182	282
23	53		106	161	78	26	8	243	320	355	675
24	117	26	65	359	190	46			567	236	803
中計	379	26	584	520	400	122	8	243	1509	773	2282

卒業 年次	全 日 制									定 時 制						小 計		合 計
	電 氣 科									電 氣 科	機 械 科	電 氣 科						
	電力課程				電氣機器課程		電氣通信課程		電氣計測課程			電力課程		電氣機器課程	電氣通信課程	全日制	定時制	
	E ₁	E ₂	E ₃	E ₄	M ₁	M ₂	C ₁	C ₂	I	E	M	E ₁	E ₂	M	C			
24										94	10						104	104
25	54	52			64		39					42	44			209	86	295
26	48	48	51	49	52		45					49	47	27	60	293	183	476
27	51	50	50		46	43	53					40	46	50	37	293	173	466
28	56	57			51		50					53		38	64	214	155	369
29	50	37			62		55		29			49		41	39	233	129	362
30	55	53			36	44	54		38			55		30	40	280	125	405
31	55	49			59		58	56	33			50		28	57	310	135	445
32	52	54			49		59	60	38			73		41	51	312	165	477
33	56	59			55		63	63	48			55		36	64	344	155	499
34	61	66			62		51	54	60			49		41	44	354	134	488
35	56	59			52		60	65	56			59		48	54	348	161	509
36	62				55		61	60	52			67		51	60	290	178	468
37	62				64		61	64	66			73		65	65	317	203	520
38	58	61			67		63		60			70		57	59	309	186	495
39	60				49		56	53	54			62		53	55	272	170	442
40	65				65		63	67	57			51		35	58	317	144	461
41												47	47		52		146	146
中 計	1696				975		1433		591	94	10	1128		641	859	4695	2732	7427

卒 業 年 次	全 日 制									定 時 制			小 計		合 計
	電 気 科			電子科		機械科		工業計測科	電気科		電子科	全日制	定時制		
	E ₁	E ₂	E ₃	D ₁	D ₂	M ₁	M ₂	I	E ₁	E ₂	D				
41	68	66		69	69	54		62				388		388	
42	54	56	50	64	59	52		56	42	39	47	391	128	519	
43	56	54		58	54	54		55	48	41	37	331	126	457	
44	61	64		67	64	68		56	64		64	380	128	508	
45	61	60		51	55	48	49		47		21	324	68	392	
46	66	63		62	64	55	55		47		20	365	67	432	
47	56	55		58	49	58	59					345		345	
48	50	51		52	52	53	53					311		311	
49	56	57		51	51	52	49					316		316	
50	55	52		61	62	49						279		279	
51	52	50		43	50	48						243		243	
52	59	59		58	56	50						282		282	
53	60	56		59	66	56						297		297	
54	51	55		49	51	52						258		258	
55	50	47		56	55	43						251		251	
56	49	50		49	51	51						250		250	
57	54	54		57	55	48						268		268	
58	50	47		51	54	53						255		255	
59	51	53		54	51	50						259		259	
60	50	50		43	43	50						236		236	
61	54	52		50	53	54						263		263	
中 計	2364			2336		1363		229				6292	517	6809	

卒業 年次	全 日 制					合 計
	普 通 科					
	L ₁	L ₂	L ₃	L ₄	L ₅	
27	37					37
28	30					30
29	39					39
30	47					47
31	58					58
32	42					42
33	50					50
34	50					50
35	60	55				115
36	55	54				109
37	55	53				108
38	51	55				106
39	59	56				115
40	63	64	60			187
41	63	64	63	65		255
42	60	63	64	62		249
43	58	56	58	58		230

卒業 年次	全 日 制						合 計
	普 通 科						
	L ₁	L ₂	L ₃	L ₄	L ₅	L ₆	
44	60	53	53	51			217
45	55	57	57	57			226
46	54	51	54	57	54		270
47	49	49	50	49			197
48	54	54	54	53			215
49	52	52	55	48			207
50	51	50	51	51	50		253
51	53	53	54	52	42		254
52	52	54	53	51	52		262
53	52	51	53	52	52		260
54	55	55	56	56	49		271
55	54	53	55	54	50		266
56	47	49	49	49	47		241
57	53	51	54	52	48		258
58	51	50	51	51	52		255
59	51	50	49	50	51		251
60	47	46	46	45	43		227
61	46	47	45	47	47	46	278
中 計	1813	1445	1184	1110	637	46	6235

後 援 会 活 動

高校後援会は昭和54年12月、学校、同窓会、PTA、およびPTA・OB等各意の努力と熱意により発足し、会員の募集等を行い具体的活動に入り満5年を数えるに至りました。クラブ活動の援助として現在は運動場への

車代等にすぎませんが、昨年よりは今年、今年よりは来年と、すこしでも生徒の活力を増大するため努めて行きたいと考えて居ります。現在後援会の組織図は下記のとおりです。



学校・学科・卒業年次別担任・クラス委員一覧

高等学校は学制改革による、校名変更や学科名変更等により、複雑なクラスわけとなっております。

各クラス委員は、現在約390のクラスがありますが、約290名のクラス委員しかおりません。まだクラス委員の決定していないクラスの皆様は是非この機会にクラス委員を決定していただけるよう御協力御願ひ致します。

また、昭和57年より高等学校同窓会会則改訂により1クラス、2名のクラス委員となりました。現在は各クラスとも1名ですが2名へ移行できるよう御願ひ致します。

クラス委員は、クラスの各人と高等学校同窓会とのパイプ役であり、しいては校友会や高等学校との連携を密にするものであります。

これらも皆様の御協力があって成り立っているものです。

クラス委員の変更なども校友会まで御一報下されれば幸いです。

表は次のように見て下さい。

24	吉田 宇一
	小竹 四郎

左図のように卒業年次の上段がクラス担任
下段がクラス委員となります。

卒業 年次	電機第一工業学校				電機第二工業学校			
	第1本科		第2本科	併設中学	第1本科		第2本科	併設中学
	電気科	機械科	電気科		電気科	機械科	機械科	
	E	M	E	J	E	M	M	J
17			稲垣 忠雄					
			佐々嶋長治					
18	堤 良富		清水 明					
	渡辺 和正		豊田 健造					
19								
20	清水 明		清水 明					
	高野 新吉		池ヶ谷道夫					
21	清野 明夫		作道 兵次					
	倉持 悦久		中村 政雄					
22			服部 三郎			加藤 高治		
			栗屋 昭					
23	清水 明		吉田 宇一		磯部 直吉 原口 喜八 深海 登世司 金森	早川 喜知	伊藤 克己	
	青木 仁		蛭間 恵治		木下 務			
24	清水 明	首藤 富家	吉田 宇一		原口 喜八	首藤 富家		
	中田 勇	常広 武雄	鈴木 治郎		戸井田 豊			

卒業 年次	定 時 制					
	電 気 科	機 械 科	電 気 科			
			電力課程		電気機器 課程	電気通信 課程
	E	M	E ₁	E ₂	M	C
24	吉田 字一 小竹 四郎	伊藤 克己 横田 実				
25			服部 三郎	吉田 字一 鈴木 治郎		
26			鈴木 徳三 荒井美喜男	鈴木 徳三	伊藤 克己 小沢 位	原口 喜八
27			横田良次郎	鈴木 徳三 駒形 昌雄	伊藤 克己	原口 喜八 小林 建雄
28			河部 貞夫 佐藤 守弘		首藤 富家	森田 恒久
29			鈴木 徳三 関根 章		首藤 富家 北風 康夫	角田 秀夫 森 真
30			河部 貞夫 宮田 利一		横田良次郎 松本 和夫	板垣 光夫 菅野 敬弘
31			小針 藤男		首藤 富家	角田 秀夫 大沢 和夫
32			河部 貞夫 茂木 実		大渡 正治 吉川 洋	板垣 光夫
33			小針 藤男 尾身 龜吉		大渡 正治 与儀 正久	角田 秀夫
34			角川 一治		小針 藤男	中島 輝夫 椎津 利雄
35			角川 一治 高島 清淳		大渡 正治	中島 輝夫 池田 恒男
36			桜井 松治 野村 力男		横田良次郎	中島 輝夫 浜川 坦
37			杉野 良知 石崎 泰司		桜井 松治 黒田 忠治	横田良次郎 宮城 一治
38			杉野 良知 上倉 幸男		下崎 和彦 安藤 忠	大江 康男 中山 勇次
39			大江 康男		吉田 字一	白川 守昭 坂本 寛
40			吉田 字一		下崎 和彦	松岡 三夫
41			見崎 正行	則友 克敏		長谷川裕一 小杉 喜美

卒業 年次	定 時 制		
	電 気 科		電 子 科
	E ₁	E ₂	
42	横 将	山崎 修快	鈴木 治郎
43	高久 広毅 加賀 勉	人見 芳行 厚谷 豊	鈴木 治郎 井筒 幸二
44	人見 芳行 大石 四郎		鈴木 治郎
45	人見 芳行 金子 英司		鈴木 治郎
46	鈴木 治郎		鈴木 治郎 石川 秋男

卒業 年次	全 日 制									
	電 気 科					電 子 科				
	電力課程				電気機器課程	電気通信課程		電気計測課程		
	E ₁	E ₂	E ₃	E ₄	M ₁	M ₂	C ₁	C ₂	I	
25	高橋 源八 中田 勇	岩佐 徹 戸井田 豊			首藤 富家 常広 武雄		角田 秀夫 森山 満隆			
26	野口 茂 加藤 正樹	大江 康男 吉田 字一	加藤 高治	佐藤 善慶	中島 輝夫	早川 宏				
27	平野 三郎 新井 昭男	大渡 正治 岩田 慶一	林 六郎 小島 輝一		中沢 (西藤) 実 今井 昇	板垣 光夫 横山 真一	桜井 松治 野瀬 健一			
28	野口 茂 橋本 光男	角田 秀夫 青木 良造			桜井 梯二郎		鈴木 藤男 渡辺 正行			
29	小西 吉孝	佐藤 善慶 渡辺 勉			中沢 (西藤) 実		中島 輝夫 荻野 宏泰		伊藤 克己 尾島 崇弘	
30	林 六郎	神庭 明 石塚 武夫			大渡 正治 小野 栄一	吉田 字一	桜井 松治 柴山 茂男		大江 康男 保坂 弘	
31	杉野 良知 原口 尚久	野口 茂			鈴木 徳三		吉田 孝俊 森 健輔	伏見栄治郎 坂井 孝志	伊藤 克己 小長谷 登	
32	角川 一治 倉林 純一	桜井 梯二郎			中沢 (西藤) 実		中島 輝夫 増田 克己	寺尾 功吉 柳 博	佐藤 善慶 松本 徳孝	
33	板垣 光夫 飛田 偉靖	渡辺 明			吉田 字一 後藤 隆夫		桜井 松治 横田良次郎	大江 康男		
34	杉野 良知	鈴木 徳三 高橋 清			中沢 (西藤) 実 松下 祐輔		野口 茂 吉田 孝俊	伊藤 克己 中野 善夫		
35	佐藤 吉弥 北村 義明	吉田 字一 名古屋 勲			鈴木 治郎 鈴木 整司		角田 秀夫 見崎 正行	佐藤 善慶 渡辺 黎一	大江 康男	
36	板垣 光夫				小針 藤男		佐藤 善慶 白井光太郎	伊藤 克己 日比野靖昌	藤田 安彦	
37	野口 茂 荒井 義久				斉藤 広吉		大渡 正治 柳田 佳孝	角田 秀夫 横溝 邦彦	石川 孝志	
38	大田 健 形屋 憲一	吉田 字一 佐藤洋志郎			横山 実		鈴木 治郎 細田 勝久	伊藤 克己 鶴見 勝義		
39	中島 輝夫				小針 藤男		高木 正夫 三橋 慶二	白井光太郎 渡辺 正行	渡辺 太	
40	中村 広幸				斉藤 広吉		桜井 松治 川村登志一	菊地 諒 倉本 馨	伊藤 克己	

卒業 年次	全 日 制							
	電 気 科		電 子 科		機 械 科		工業計測科	
	E ₁	E ₂	E ₃	D ₁	D ₂	M ₁	M ₂	I
41	大田 健	大田 健		角田 秀夫	鈴木 治郎	横山 実		中田 勇
	石附 正				印宮 登	渡辺 高幸		荏司 仁
42	松岡 三夫	加藤 栄治	宮崎 晃	白川光太郎	川島 純一	伊藤 克己		大江 康男
	原 邦男		畑山 昭一	平賀 徹		川田 純		新山 恒夫
43	齊藤 成信	中村 広幸		桜井 松治	菊地 諒	齊藤 広吉		渡辺 太
		和田 真一		杉本 好造				
44	中村 隆一	中田 勇		高村 広昭	見崎 正行	横山 実		大江 康男
	赤川富美樹	山越 茂雄		花嶋 秀年	菊嶋 和則	岡田 和恭		由井 康雄
45	宮崎 登	加藤 栄治		白井光太郎	川島 純一	松岡 三夫	横山 実	
	酒井 明	岡本 清次		松村 雅之	小川 晴夫	小野 喜之	鳥飼 洋一	
46	大田 健	中村 広幸		白井光太郎	高村 広昭	石川 孝志	伊藤 克己	
	川本 敏	秋山 清隆		石橋 和夫		田畑 有三	阿部 俊	
47	鈴木 治郎	渡辺 太		見崎 正行	中村 隆一	大江 康男	山田 宏明	
	大橋富士人	山田 宏己		早坂 幸雄	持木 文男	谷田部 宏	船田 嘉章	
48	宮崎 登	加藤 栄治		松岡 三夫	川島 純一	大湯 幸夫	横山 実	
	山内 利夫	尾身 栄一		日野 一武	渡辺 敏章	林 達也	大羽 克己	
49	間辺幸三郎	高橋 源八		白井光太郎	大谷 稔	高村 広昭	中村 広幸	
		山口 孝博		高橋 康一	岡田 孝治		石塚 仁史	
50	高橋 源八	中村 隆一		見崎 正行	前嶋 万人	大湯 幸夫		
	高瀬 裕司	杉浦 義彦		大谷 茂	佐藤 仁	高瀬 勝義		
51	宮崎 登	鈴木 博		五十木基晴	大江 康男	横山 実		
	平井 広史	神田 庄一		柳川 守	吉田 邦男	池田 邦明		
52	間辺幸三郎	高村 広昭		菊地 諒	大谷 稔	横 将		
		大塚 徹		村上 裕一	前嶋 宏二	海川 次郎		
53	鈴木 博	中村 隆一		見崎 正行	宮本 治	大湯 幸夫		
	後野 明仁	相川 次男		秋山 益満	清水 敏久	本間 昭伸		
54	宮崎 登	田上 光治		前嶋 万人	大谷 稔	横山 実		
	箱田 浩二	吉田 俊司		三輪 浩康	山際 康之	平澤 輝男		
55	松岡 三夫	津村 栄一		菊地 諒	高村 広昭	横 将		
	石井 和之	手塚 勝		山田 富夫	稲川 秀勝	小林 正一		
56	鈴木 博	中村 隆一		見崎 正行	林 幸男	横山 実		
	鈴木 幸治	山崎 育昭		鈴木 昭広	新谷要次郎			
57	齊藤 広吉	則友 克敏		前嶋 万人	生熊 勝彦	山田 宏明		
	滝沢 聡	天野 裕一		平沢 一寿	今尾 裕	早坂 勝浩		
58	鈴木 治郎	津村 栄一		見崎 正行	人見 芳行	山路 雅一		
	福原 幸規	木村 武晴		山崎 誠人	富井 清隆	江部 智治		
59	鈴木 博	高村 広昭		向芝 京太	石川 孝志	横山 実		
	浅田 直樹	亀岡 和裕		大曾根康史	土屋 岳剛	鈴木 久郎	正成	
	在藤 和幸	星野 雅幸		松田 和哉	松本 剛	鈴木 正成	龍男	
	斉藤 広吉	大田 健		渡辺 太	前嶋 万人	小峯 龍男		
60	青沼 孝一	宮崎 佳之		安井 哲也	染野 明孝	猪鼻 一芳	道義	
	深見 孝一	野本 浩		石井 俊一	笠木 孝夫	岩崎 治		
61	津村 栄一	鈴木 治郎		見崎 正行	生熊 勝彦	宮本 治		
	中村 登	西井 光利		鳴島 浩	大和田 誠	新井 智也		
	河又 信司	亀田 秀明		増喜 太郎	松下 慎一	山岸 岳人		

卒業 年次	全 日 制			
	普 通 科			
	L ₁	L ₂	L ₃	L ₄
27	青木 成宗			
	新井良二郎			
28	吉田 孝俊			
	諸橋 弘之			
29	宮本 敏雄			
	川西 康夫			
30	平野 三郎			
	大森 雄一			
31	佐藤 吉弥			
	黒岩 藩			
32	大久保芳随			
33	神庭 明			
34	伏見栄次郎			
35	大久保芳随	北原 泰彦		
	鈴木 恭雄	前嶋 万人		
36	神庭 明	大渡 正治		
	相川 祐三	植田 正昭		
37	伏見栄次郎	吉田 孝俊		
	五島 奉文	藤田 明也		
38	大久保芳随	伏見栄次郎		
	加藤 計夫	我妻 功規		
39	神庭 明	板垣 光夫		
40	吉田 孝俊	伏見栄次郎	平野 三郎	
	渡辺 貞綱		高崎 新平	
41	大渡 正治	杉野 良知	石川 孝志	大久保芳随
	草間信一郎	野村 仁	村田 陽一	松井 努
42	中島 輝夫	山田 宏明	磯部 昭二	白川 守昭
	光木 保臣	戸江 栄一		大館 敏夫
43	神庭 明	石川 孝志	板垣 光夫	吉田 孝俊
	上原 博通	宮沢 秀実	六反田和幸	
44	山田 宏明	磯部 昭二	中村 圭佑	大久保芳随
	中村 悟	杉山 行男	渡辺 洋一	木伏 明人

卒業 年次	全 日 制					
	普 通 科					
	L ₁	L ₂	L ₃	L ₄	L ₅	L ₆
45	中島 輝夫	五十木基晴	則友 克敏	白川 守昭		
			菱田 豊彦			
46	杉野 良知	横 将	板垣 光夫	高久 広毅	茂木 雅博	
			本居 幸治		嵯峨崎孝吉	
47	大久保芳随	磯部 昭二	齊藤 成信	高久 広毅		
		三宅 清	浅見 正一			
48	中島 輝夫	人見 芳行	則友 克敏	白川 守昭		
	明石 弘一		木村 晴彦	佐藤 孝雄		
49	杉野 良知	板垣 光夫	石川 孝志	茂木 雅博		
	半田 孝	中台 淳一	新井 建也	藤田 清		
50	杉野 良知	磯部 昭二	齊藤 成信	高久 広毅	山田 宏明	
	黒田 正人		川島 正春	古城 仁	秋山 公一	
51	石川 孝志	則友 克敏	人見 芳行	松岡 三夫	林 幸男	
	松丸 昭彦	安藤 政旦	石井 正一	種田 光利	柴山 仁	
52	神庭 明	白川 守昭	板垣 光夫	中村 広幸	茂木 雅博	
	増田 桂一		小野木広行		石渡 上	
53	杉野 良知	中村 圭佑	松岡 三夫	高久 広毅	齊藤 成信	
		目黒 香一	松岡 俊和	相原 浩一	遠藤 史郎	
54	石川 孝志	則友 克敏	磯部 昭二	生熊 勝彦	板垣 光夫	
	宮本 真入		小山 洋一	小出 修男	坂本 尚孝	
55	大江 康男	齊藤 成信	人見 芳行	林 幸男	茂木 雅博	
	本橋 功次	花房 勤	貴田真一郎	瀬賀 幸一	生方 健二	
56	五十木基晴	中村 圭佑	宮本 治	高久 広毅	白川 守昭	
	大館 昭彦	沢田 勉	吉水 雅彦	糸川 剛	道伝 弘昌	
57	大谷 稔	田上 光治	磯部 昭二	石川 孝志	板垣 光夫	
	木村康二郎	山瀬 智晴	小林良太郎	小野寺智幸	飯塚 美治	
58	大江 康男	石井 和之	高村 広昭	横 将	松岡 三夫	
	岩本 健	及川 俊也	飯田 公司	岩井 厚	長堀 岳治	
59	宮本 治	吉場 章二	高久 広毅	大谷 稔	白川 守昭	
	鈴木 幹也	内藤 剛	松島 克幸	藤原 国之	加藤 剛	
	下間 靖浩	中島 忠彦	野村 幸男	磯部 昭二	山崎 晴康	
60	宮田 寛	高田 剛史	大山 真一	小宮山敏樹	今中 繁義	
	向 裕次	宮坂 茂春	京極 政宏	腰原 敏	坂田 朝徳	
	古城 仁	則友 克敏	田上 光治	横 将	吉場 章二	
61	小俣 藤森	憲一 勝己	海老澤 浩章	青木 規夫	岩見田慎也	
			西木 章員	服部 義郎	志村 祐幸	
					木齊 史	
					安達 三博	
					横田 昇	

《 昭和60年度 事業報告 》

事業種目	日時・場所・内容	出席者等
25周年記念事業	昭和60年6月22日(土) ・記念講演 於：小石川校舎体育館 「エレクトロニクス先端産業と今後の方向」…石川 明 日本T1社長 ・記念祝賀会 於：後楽園会館 ・同窓会誌「朋友」25周年特別号発行	会 員62名 特別会員26名 来 賓21名 準 会 員35名
総 会	昭和60年6月22日(土) 於：小石川校舎体育館	
教職員連絡会	昭和60年11月15日(金) 於：後楽園会館 ・卒業生招待会(ホームカミング) 等について討議	教 職 員2名 幹 事15名
クラス委員会	昭和60年10月12日(土) 於：後楽園会館 電校祭初日、同窓会現状報告	教 職 員11名 会 員28名
新会員説明会	昭和61年3月5日(水) 於：小石川校舎体育館 ・新卒業生に高等学校同窓会の現状説明	終業式場にて 印宮同窓会長
新クラス委員懇談会	昭和61年3月5日(水) 於：小石川校舎 ・新クラス委員となる人と幹事の懇談会 ・高等学校同窓会への積極的参加要請他	教 職 員2名 新クラス委員19名 幹 事5名
卒業記念品の贈呈	昭和61年3月7日(金) 於：卒業式 ・証書挟み・南部鉄製鍵型栓抜	卒業式に松下、池ヶ谷、印宮参列
クラス委員名簿の改訂・発行	昭和60年5月：委嘱状と承諾書の発送・回収 昭和60年9月：第9回改訂名簿の発行(朋友に合冊)	
クラス会開催の補助	クラス会を開催するクラスに補助金として5,000円を支給	37クラス
75周年記念事業への協力支援	学校法人75周年記念事業への協力支援	
準会員活動援助(校友会準会員事業基金の運用)	昭和60年9月21日(土) 於：小石川運動場 ・体育祭のクラス別対抗表彰・全員に参加賞の配付 昭和61年1月14日(火) 於：郵便貯金会館 ・第7回文化講演会「自然の心を知る」矢口高雄氏 昭和61年3月5日(水) 於：小石川校舎体育館終業式場にて ・クラブ活動優秀者の表彰 3名	印宮同窓会長 池ヶ谷後援会長 印宮同窓会長 池ヶ谷後援会長 印宮同窓会長

《 昭和60年度 収支決算報告 》

(自 昭和60年4月1日～至 昭和61年3月31日)

収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
入 会 金 462名×3,600円 1名×1,200円	1,664,400	25周年記念事業費 ・記念講演費及び講演関係諸費	1,314,130 77,000
補 助 金	173,525	・記念祝賀会費及び祝賀会関係諸費	640,200
利子・配当金	299,605	・記念誌製作費及び発行関係諸費	521,330
雑 収 入	151,000	・25周年記念事業委員会費	75,600

25周年記念事業基金

1,000,000

事業費

666,155

・総 会 費

66,035

・クラス委員会費

134,300

・クラス会補助費

185,000

・卒業記念品費

151,400

・クラス委員名簿費

108,100

・教職員連絡会費

87,720

会 議 費

126,740

同 窓 会 の

《 同窓会役員 》

名誉会長 吉 田 宇 一

会 長 印 宮 登

副 会 長 見 崎 正 行

〃 須 賀 寛 光

《 60・61年度役員(幹事) 》

氏 名	卒年	居住地
佐々嶋 長 治	17	北 区
安 田 正 男	18	北 区
池ヶ谷 道 夫	20	市 川 市
清 水 岩 生	20	世田谷区
海老原 宮 一	23	浦 和 市
中 村 広 幸	24	市 川 市
北 風 康 夫	29	大 田 区
間 川 清太郎	29	飯 能 市
見 崎 正 行	35	秦 野 市
萩 原 宏 芳	35	川 口 市
石 崎 泰 司	37	江 戸 川 区
渡 辺 敏 章	48	北葛飾郡
須 賀 寛 光	49	越 谷 市
山 口 孝 博	49	町 田 市

〔会計監査〕

加 藤 栄 治 30年卒 川 越 市

活 動 報 告

参 与 驚 見 篤 23年卒

〃 谷 沢 正 一 郎 23 〃

〃 野 瀬 健 一 27 〃

〃 加 藤 康 太 郎 29 〃

〃 賀 張 雅 弘 31 〃

《 61・62年度役員(幹事) 案 》

氏 名	卒年	居住地
豊 田 健 造	18	小 平 市
阿久津 功	23	流 山 市
今 田 正	24	武蔵野市
鈴木 治 郎	24	新 座 市
宇 野 敬 助	24	柏 市
柴 山 茂 男	30	横 浜 市
小長谷 登	31	横 浜 市
松下 祐 輔	34	朝 霞 市
日比野 靖 昌	36	文 京 区
大 塚 忠 克	39	入 間 郡
北 尾 義 弘	40	相模原市
印 宮 登	41	江 東 区
向 芝 京 太	48	東 村 山 市
平 野 修 一	49	越 谷 市
古 城 仁	50	川 崎 市
鈴 木 元 樹	54	市 川 市

〔会計監査〕

横 山 真 一 27年卒 船 橋 市

《 財 産 目 録 》

昭和61年3月31日現在

項 目	基本財産 (1)	基本財産 (2)
内 容	東京電力社債	中期国債ファンド
金 額	3,000,000	1,000,000

《 昭和61年度 事業計画 (案) 》

事業種別	内 容	日 程
総 会	於：小石川校舎 実演室(総会) 体育館(懇親会) 1.昭和60年度事業報告、決算報告、会計監査報告並びに承認 2.昭和61年度事業計画案、予算案の審議並びに承認 3.役員の変更 4.その他	昭和61年6月21日(出)
同窓会誌「朋友」の発行	同窓会誌「朋友」昭和61年版の製作及び発行(クラス委員名簿を含む)	昭和61年9月
教職員連絡会	教職員と諸事項について協議及び懇談	昭和61年11月
クラス委員会	クラス委員相互・幹事との懇談会 同窓会・高等学校後援会・校友会への支援要請	昭和61年10月 電校祭初日
クラス委員の委嘱	クラス委員に委嘱状と承諾書の発送・回収	昭和61年5月
新会員説明会	新卒業生に高等学校同窓会の現状説明	昭和62年3月 終業式場にて
新クラス委員懇談会	新クラス委員となる人と幹事の懇談会(高等学校同窓会への積極的参加要請他)	昭和62年3月 終業式後
卒業記念品の贈呈	証書挟み・南部鉄製鍵型栓抜 校友会との共催	昭和62年3月 卒業式
クラス会開催の補助	クラス会活動を活性化するために、クラス会を開催するクラスに補助金として5,000円を支給(他に校友会より10,000円と通信費学校法人より5,000円が支給されます。)	随 時
準会員活動援助	体育祭・文化講演会・クラブ活動等の活動援助(校友会準会員事業基金の運用)	
卒業生招待会の協力	卒業生招待会(ホームカミング)の協力	

《 昭和61年度 収支予算 (案) 》

(自 昭和61年4月1日～至 昭和62年3月31日)

収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
入 会 金 541名×3,600円	1,947,600	事 業 費	2,150,000
		総 会 費	800,000
		クラス委員会費	150,000
補 助 金	20,000	クラス会補助費	250,000
		卒業記念品費	170,000
利子・配当金	300,000	同窓会誌製作発行	650,000
		費	
雑 収 入	100,000	新クラス委員懇談	10,000
		会費	
		教職員連絡会費	120,000
		会議費	130,000
		会 務 通 信 費	80,000
		諸 予 備 費	90,000
			38,827
小 計	2,367,600	小 計	2,488,827
前期繰越金	121,227	次期繰越金	0
合 計	2,488,827	合 計	2,488,827

クラス会お祝金について

同窓会あるいは校友会が発展する基礎は、クラス会が活発におこなわれることだといわれています。高等学校同窓会においても、卒業生の母校に関連する活動を支援するものとして、クラス会を開く方々へお祝金という形をとって、ささやかですが御協力をさせていただいております。

同窓会の上部団体である(社)東京電機大学校友会でも、同様な主旨のもとにお祝金を支出しておりますが、これは校友会が発行する「卒業生名簿」について、住所勤務先、電話など、名簿の改訂整備のデータを得るためという側面を有しております。

【お祝金のフロー】

計画をたてたら
校友会の担当者
へ連絡して下さい。



1. 校友会事務局への連絡

まず開催日の1週間前までに校友会事務局の高等学校同窓会担当者へ連絡して下さい。電話でけっこうです。

必要な内容は、卒業年次・科名、開催日・場所・時間幹事氏名と連絡先、クラスの人数そして先生を招待する場合はお名前などです。細かい点は担当者が御相談いたします。

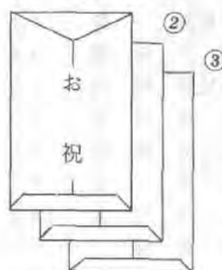
2. お祝金のフロー

お祝金についての情報は、高等学校同窓会の部分を重点として描くと略図のようになります。

先生が出席される場合は、校友会から学校法人東京電機大学へ連絡され、お祝金が支出されます。当然のことですが、校友会においても同様な処理がおこなわれます。(但し、先生の出席の有無にかかわらず、お祝金は支給されます)

なお、補助的なものとして、クラス会の連絡用ハガキの交付もなされます。

- ① 学校法人
東京電機大学
- ② 社団法人
東京電機大学校友会
- ③ 郵送料補助金
(校友会)



【お祝金々額】

高等学校同窓会	5,000円
東京電機大学	5,000円
東京電機大学校友会	10,000円

お祝金の支給状況 (件)

昭和51年	35	昭和56年	25
52	28	57	40
53	34	58	24
54	33	59	21
55	23	60	37

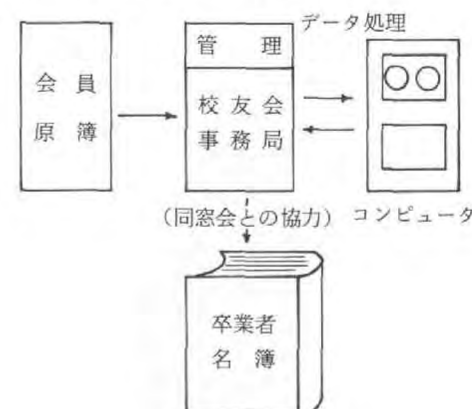
*お願い

クラスの住所録を必ず校友会へお送り下さい。

名簿の整備・校友会案内

同窓会が充実しているかどうかは、その名簿を見ればわかるといわれています。名簿の充実している会は、その活動も活発です。

本会の名簿は、最近では57年度に発行いたしました。本年も次の様な名簿の整備と充実を計画しておりますので宜しく御協力をお願い致します。



1. 原簿の整備

本会の会員名簿の原簿はデータ処理を迅速、かつ、正確に行うためコンピュータによって処理されています。同窓会は会員の皆様から住所、勤務先などの変更届が出されると、直ちに原簿であるマスターテープを修正し、つねに最新のデータが格納されるよう努めています。

住所・勤務先 その他に変更がありましたら、必ず校友会に御一報願います。また同様に、知人、友人につきましても現在発行している名簿より、変更されていまして、校友会に御連絡下さい。

東京都千代田区神田錦町1-4
東京電機大学校友会内 高校卒業生名簿係
TEL 03-294-1551 (内線5550)

2. 名簿の頒布

57年度に発行した同窓会名簿を購入御希望の方は、代金2,500円(送料は別途300円)を添えて現金書留でお申し込み下さい

なお、残り少なくなっておりますので、なるべく早めにお申し込み願います。

校友会費を納めましょう!

高校同窓会の行事や学園の近況などは工学情報に記載されます。お手元に届いていない方は、下記のとおりお申し込み下さい。また、クラス会開催の場合、祝い金等の制度もありますので名簿編さん(住所・勤務先)とも併せてご協力くださいますようお願いいたします。

記

・3年分会費	6,000円
・5年分会費	10,000円
・終身会費	60,000円

(会費には工学情報講読料が含まれています。)

◎ 納入方法

1. 郵便振替
2. 現金書留
3. 銀行口座自動引落制度

校友会は、皆様からの会費によって運営されております。財政的な基盤が確立していなければ十分な校友会活動もできません。ぜひとも多数の卒業生に会員になっていただき、校友会並びに母校の発展充実に一段のご支援をお願い申し上げます。

校 歌

東京電機大学高等学校校歌

土 岐 善 磨 作詩
信 時 潔 作曲

(一)

都心の天地は高くひろく
輝き集る時代の文化
科学と技術の上に立ちて
真理を仰げば富士に雲なく
勤労の道に希望あり

(二)

創意の火花は潔くさえて
平和のいとなみ昼夜絶えず
社会の進歩を共にうけて
静かにたどれば回路正しく
新たなる世界開けたり

(三)

歴史に栄ゆる電機学園
高校我等の負いゆく使命
親愛ひとしく競う意気に
相呼び相寄る自治のよろこび
協同の歩み力あり

学 園 歌

堀 内 敬 三 作詩・作曲

(一)

若き命の 花萌えて
湧きづる力 限りなし
電光を駆り 雷を呼ぶ
未来へ進む この門出
われらは集う 電機学園

(二)

新たに国は よみがえり
飛躍の天地 いま開く
電波に結ぶ 西東
栄えの春を 築くべく
われらは学ぶ 電機学園

(三)

大地の極み 雲のはて
幸をたずねて ゆくととも
誓は固き 幾万の
心の家と 永久に
われらは護る 電機学園

● 編集後記 ●

昨年、同窓会25周年特別号として発刊された小冊子『朋友』が、内容を踏襲し、今年から同窓会誌として発刊して行くことが決定されました。私共3人は、特別号の編集担当ということで貴重な体験をさせていただきましたが、本年度も、再度経験者ということで編集担当に選任されました。昨年の経験が充分活かされたかどうか疑問ですが、名誉会長を始め、日本T I 社 石川社長、蓮見前学園理事長、そして高等学校教職員の方々と、大勢の方のご協力とご援助をいただき、何とか発刊することができました。ここに、あらためて厚くお礼申し上げます。

〔編集担当〕 柴山茂男・石崎泰司・須賀寛光

昭和61年6月21日 発行（非売品）

〔編集兼発行所〕

東京電機大学高等学校同窓会

住所：東京都千代田区神田錦町1の4

東京電機大学校友会内

電話：03-294-1551（代）

東京電機大学高等学校

住所：東京都文京区後楽1-7-26

電話：03(813)6911（代）